

## 対人援助実践で行き詰り，本と出会う

渡辺修宏  
小幡知史  
二階堂哲

### 何をしたらいいのか，どこにいったらいいのか，わからず

私（渡辺）の職場で日常化した，援助者による「殴る」，「蹴る」。

時に，「おめえ（お前）」とか，「バカ」とか，「死ね」という言葉をも，伴った。

もちろんその相手は利用者であり，全員に知的障害ないし肢体不自由があった。

つまり，福祉施設の中で，援助者による援助の実態の1つが，なんらかの援助を要するがゆえにそこに入所利用する利用者への身体的，あるいは，心理的虐待であったのだ。少なくとも，私にはそう見えた。私以外の同僚は，それを「愛の鞭」と呼んでいたが。

虐待か，「愛の鞭」か，どちらが正しいか，…ということより，そもそも，仕事に対する意識や考え方において共有化できない現実には，私は，もがき苦しんだ。

上司や同僚と，仕事に対する意識や考え方をわからぬまま，なにをどうすればいいのかわからない状態に陥っていた。

前に進むことも，逃げることもできない，恐ろしい泥沼にすっぽりはまったかのような，そんな日々を過ごさざるをえなかった。

職場にいる時はもちろん，自宅に帰っても，どこに行っても，気分が晴れることはなく，そもそも，どこにいても，自分が「存在している実感」すら感じられず，四六時中，どこに行けばいいのかと自問自答するようになっていた。

ある日の夜勤明け後，その時も，私はそのまま自宅に帰ることでできず，ただ，街を徘徊するように自車を運転していた。

気分は重く沈み，仕事に対するもやもや感に浸りながら，田畑が広がる郊外を見渡しながら，ロボットみたいに無感情にハンドルを操作して，ただ時間をつぶすように，運転していた。

そんな時，たまたま走っている地域が，学生時代にボランティア活動で一緒だった先輩，Iさんの自宅近郊であることに気が付いた。車で2～3分のところに，Iさんのご自宅があったのである。ふと，ハンドルを握る感触が意識に戻ってきて，アクセルを踏む足の力が弱まった。

Iさんは，私にとって，尊敬できる先輩の一人であった。

「絵にかいたような真面目で、何事にも一生懸命な好青年」、それが、私にとっての I さんであった。

妙ななつかしさに駆られて、私は、I さんの家に車を走らせた。

当時、I さんは地元の行政機関で働いていたので、夜勤明けの私が彼に会えるわけもないと思いつつも、それでも暇をつぶすように、私は I さんの自宅を訪問した。

そして、本当にたまたま、運が良いというか偶然にも、I さんは自宅に居て、私は彼と久方ぶりに再会した。

学生時代以来の再会を喜んでくれた I さんは、気持ちよく私を彼の自宅に迎え入れてくれて、私は誘われるままに彼の部屋に入り、お茶をごちそうになった。

おいしいお茶を飲み、彼のさわやかな笑顔を見て、私はこらえきれなくなった。

まるで啖呵を切ったように、土砂崩れを起こしたかのように、私は I さんに話し始めてしまった。

「…I さん、ちょっと話、聞いてくれませんか？俺…辛いんです。」

すると I さんは、さっきまでの笑顔を横に置き、腰をじっくりすえなおし、まるでお地藏様だかお釈迦様みたいな、やわらかでしっかりとした物腰と態度で、私の話に静かに耳を傾けてくれた。

私は、吐き出すように仕事の悩みを吐露した。おそらく、5-6 時間もの間、I さんは、ずっと私の話しにつき合ってくれた。

私のまとまりのない話が一段落するとき、すでに外は暗くなっていた。

I さんは本当に真摯に、私の話につきあってくれた。時折、頷いたり、考え込んだりはするものの、1 度も私の話を遮ったり、まして、否定・批判することはなかった。

そんな I さんの態度に私は、じわじわと驚きと感動を覚えた。

「(…なんだから、ここまで私の話を聞いてくださるのだろう)」と。

話につき合ってくださいという感謝はもちろんだが、そんな有難みよりも、やがて、そこまで徹底傾聴できる I さんのお人柄への驚き、あるいは不思議さのほうが強まっていった。

窓の外の暗さに気づいた頃、私は自分の職場の話から、I さん自身への質問に、話題を変えた。

「ねえ、I さん、なんで I さんはそんなに優しく、根気強く、私の話につきあってくれるんですか？その I さんの強さというか、大きさというか…、I さんのその人間性は、どうやって生まれたんですか？どこから来たのですか？」

こんな機会はないとばかりに、私は忌憚なく、躊躇いをかなぐりすて、非礼を飛び越えて質問した。

すると I さんは、そんな話題変更にちょっとためらいながらも、顕著な態度を示しながら

しばし考え、突然、部屋の奥から一冊の本を持ち出した。

Iさんが手に取った本は、森信三（1989）著の「修身教授録」であった。

おそらくIさんは、何度もその本を読んだのだろう。読み込んだのだろう。読み尽くしたのだろう。本はかなりボロボロで、あちこちが手垢にまみれていた。出版されてまだ数年なのに、まるで数十年も保管されているような雰囲気すらあった。

「この本が僕を育ててくれたんだよ。」

Iさんはまた、実にさわやかな笑顔で、その本を私に手渡してくれた。

私は、両手でその本を受け取って、しばし、表紙を凝視した。

### Iを育てた「修身教授録」

その本は、大阪天王寺師範学校（現・大阪教育大学）本科での森信三先生の講義をまとめた「修身教授録」（全5巻、昭和14年刊）の中から、昭和12年3月～昭和14年3月までの2年間の講義を編集しなおしたものであった。

*「学者にあらず、宗教家にあらず、はたまた教育者にあらず、ただ宿縁に導かれて、国民教育者の友としてこの世の『生』を終えむ。……私の内面には、常に全国50万の国民教育者の姿が消えたことはない」*

Iさんによると、「国民教育の師父」と謳われ、不世出の哲学者と呼ばれる森信三先生は、1万回以上にも及ぶ全国行脚の旅を通し、学校経営や教師自身の生き方を説き続けたという。

教師を目指す学生に向けた講義にもかかわらず、「死生の問題」、「人生二度なし」など、本質的かつ簡潔に人生の要諦を解き明かした教えは、年齢、性別、職業を超え、万人の心を打つ不滅の輝きを放ち、いまなお、その人となりや教えを慕う人々の数は増え続けているという。また、SBIホールディングス社長の北尾吉孝氏、経営コンサルタントの小宮一慶氏、リブセンス社長の村上太一氏など、森先生の著書を愛読書として挙げる経営者やビジネスマンは少なくないという。

*「人生の意義とは、たとえて申せば、ここに一本のローソクがあるとして、そのローソクを燃やし尽くすことだとも言える。つまり半分燃やしただけで、残りの燃せさしをそのままにしておいたんでは、ローソクを作った意味に叶わないわけです。ローソクは、すべてを燃やし尽くすことによって、初めてその作られた意味も果たせるというもの……」*

森先生曰く、「自分という一本のローソクをどう燃やし尽くすのか。」

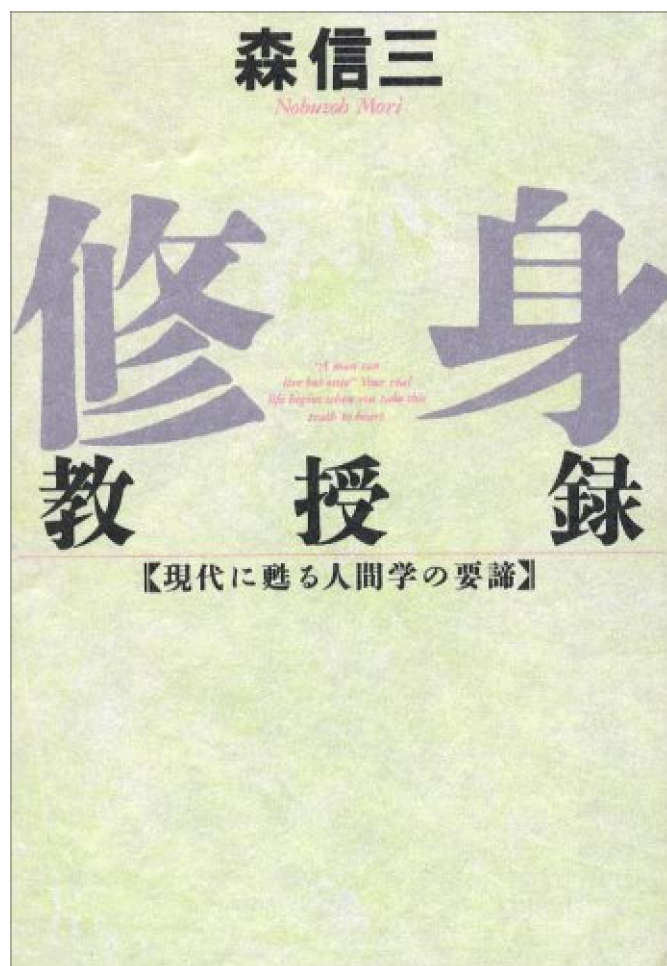
未来を担う若者を前にして、巖壁に刻むかのような気迫と情熱を持って発せられたという森先生の言葉の数々が、真摯に人生に向き合おうとするすべての人々に、進むべき道を指し示すという…。

そんなエッセンスが詰まった一冊が、「修身教授録」だったのだ。

私はその場で、その本をお借りできないかと、懇願した。

その本を読めば何かがわかるような気がして。

Iさんは、これまた実にさわやかな笑顔で、「もちろん、ぜひ読んでくれ。きっと修宏君にとって、いい学びがあるよ」と、快諾してくれた。



森信三（1989），致知出版社

対人援助実践の樹海で迷い，一冊の本と出会う

「修身教授録」は，一見，対人援助臨床をかかわりのない本であった。

ただ、人として、社会の中で、どう生きるか、という問いを、時代や文化に振り回されることなく、とめどめなく投げかけてくる内容で満ちていた。

私は自宅、自室で、この本を読み漁った。

時に、横になって本を広げた

時に、バックに忍ばせて街を歩いた。

時に、助手席に本を置いて、ドライブした。

頭の中では、他愛もない疑問が降っては湧いてきた。

なぜIさんは、私にこの本を貸してくれたのだろうか？（私が頼んだにしても）

Iさんは私に、この本から何を感じてほしかったのだろうか？

Iさんは私に、何を伝えようとしてくれているのだろうか？

私は、あの職場でどう在ればいいのか？

私は、これからどうやって生きていけばいいのか？

・・・おそらく毎日、そんな問いを空に投げかけてながら、私は生活した。

私は、「仕事を辞める、この職場を去る」ということを、選びたくなかった。

なんというか、それは単なる「逃げ」になると思ったからだ。

「愛の鞭」を「虐待」と言い放った者の誤りが認められるような気がして、絶対にやめるわけにはいかないと考えていた。「愛の鞭」の前に、敗北したくなかったのだ。

しかもそれは、私一人の、小さな信念の敗北のみならず、わが国（の、ある地方の、たった1つの小さな福祉施設内における）の社会福祉の衰退の一步にすらなるだろうと、実に大げさに、実に自分勝手に考えていたのだ。

実に生意気で、増上慢で、大げさであると、おそらく読者は失笑されるだろう。

だが、若かった私は当時、「ルーサーキング牧師や、マザーテレサや、マハトマ・ガンジー、糸賀一雄なら、絶対辞めないだろうから、私も辞められない」と思っていた。

そんな思いで、自分の内側から湧き出る恐怖や不安や無気力と向き合っていた。

崖っぷちに立たされて、いつ倒れて、いつ崖から落ちて死ぬのか、というような、薄氷の上を歩く心境だったのだ。

そんな心持ちで、「修身教授録」を紐解いた。

どこかで、「Iさんだったら、今、どうする？」と、尊敬する先輩の姿を想像した。

森先生の名言が心に染み込んでいった。

名言は道を拓くというが、まさにそんな、道を切り開く音が脳内で響く様に、ゆっくりとしっかりと、ページをめくっていったのだった。

・・・やがて、1つの答えが、私の内側から芽生えてきた上司、同僚に、「今の自分の気持ちをわかってもらう、受け止めてもらう」という解決を求めることは、必ずしもベストではない、ということに気がついた。

それは、上司、同僚に「変わってもらう」という他力本願であれば、なおさらであろう、と。

自分にできることは、「自分が変わること」である。

もちろん、それは、妥協とか、黙認黙殺とか、見て見ぬふりという意味ではない。

自分自身の変化によって、自分が苦しいと感じる局面・事態の変化の兆しを、産み出すことであろうということだ。

もし、「自分は間違っていない」と、自分自身の変化を拒否するのならば、一番変化させたい目の前の状況は、ずっと変わらないままだろう。まず、自分自身が変わる勇気を持たなければならない。それはつまり、まず自分が、もっと学んで、もっと成長して、もっと強くなって、もっと高いレベルに至ることなのだろう。

そのような気づきを得て初めて、私は、かつて X から、あるいは、上司や同僚から指摘された、「渡辺がちょっと大人になって、成長しなければ問題は解決されない」という言葉を、ようやく受け止められるようになった。

彼らの指摘は間違っていなかった。

私は盲目していたのだ。

私は、自分は間違っていないとだけ、頑固に考えすぎていた。

私にできることと、すべきことは、私自身を変えることであった。

反省の念が生まれて、頭が下がった。

感動が湧き出て、心が晴れてきた。

自分がやるべきことをやろうという気持ちが定まった。

やるべきことをやることが、自分自身の内側からあふれてくる苦しい感情を唯一払拭できることであり、また、援助者として、利用者のために遂行すべきことだと思った。

### 対人援助実践をレポートするために

はっと気付くと、「修身教授録」を読んで、2年、あるいは3年が過ぎていた。いつの間にか、XもYも職場から消えていた。

「愛の鞭」という名の暴力が、職場から完全に消えたわけではなかったが、すでに世の中では、「虐待は良くない」という声が以前より大きくなってきていた。社会福祉基礎構造改革なる文言が、あちこちで飛び交い始めていた。

さらに数年たつと、介護保険制度が開始され、従来の措置制度は利用契約制度に変わった。支援費支給制度、障害者自立支援法、障害者総合支援法・・・次々と法律が変わり、伴って、障害者支援領域のあり方は見直されていった。必ずしも順調に、と、いうわけではなかったが、「古き体質は改善しよう」という方向性だけは、一貫していたように思う。

時代はどんどん変わるが、私はいつでも、相も変わらず、対人援助とは何か？という問いを持ち続けていたようであった。

あれこれ学ぼうとしているうちに、職場の内外でいろいろな出会いを得た。

そこで気づいたことは、対人援助臨床で迷い、悩み、苦しんでいるのは、私一人ではない

ということだった。

数えきれない援助者たちが、その中身や程度はバラバラなれど、皆、真摯に、そして利他的に、対人援助とは何かと、悩み苦しんでいた。

魅力的な援助者、力量が高い援助者ほど、大なり小なり、もがいているように、もがきやすいようにみえた（そうみえたのは、もしかしたらたまたま、そして私だけかもしれないが）。

例えば、障害児支援領域で療育に携わる小幡知史氏は、援助における科学性と、それに基づく援助の効果について深く思索されていた。まるで、答えのない問いに挑み続けるような冒険者のようであった。

例えば、特別支援教育領域で教育に携わる二階堂哲先生は、障害を持つ児童のひとりひとりにあった教育的かかわりが、いかにその児童の発達と可能性を左右するか、人生を大きく変えるのかについて、実に真摯に向き合っていた。彼の、児童を思うまなざしは、慈しみに満ちた聖者のようであった。

そして小幡氏も二階堂先生も、実に、勉強熱心であった。

そう、かつての渡辺に道を照らしてくれたIさんのように、小幡氏も、二階堂先生も、臨床で額の汗をぬぐいながら、片手に本をもち、時にその本を開き、本から得た学びを臨床にむすびつけていたのであった。

歩みながら学び、学びながら歩む。そのような彼らのひたむきさは、常にご自身の実践をリブートし続けるような生き様そのものであった。

リブート (reboot)。意味は再起動。再始動。

対人援助臨床で行き詰ったら、そう、リブートを試みる。

そんなリブートのスイッチは、私にとっての「修身教授録」のように、もしかしたら良書なのかもしれない。

2020年秋季、小幡氏、二階堂先生、そして渡辺の3名は、対人援助学会年次大会で、企画ワークショップを開催した。

そのワークショップのタイトルは以下の通り。

「対人援助実践をリブートするこの1冊」

- つづく -